

II部 発表五

## 死を超越する愛と想像力

ジェイソン・デインリー

### 導入

今日、我々が聞いた発表はすべて、日本の高齢化社会が、日本における生と死の理解のあり方に変化をもたらさざるを得ないという論じるものであった。自殺からホスピスケアに至るまで (From suicide to hospice care)、この歴史的にも類を見ない人口の変化は、相反する、あるいは、敵対する力としての生と死に関して我々がもつ前提を問い直し、それらがどのように我々の社会意識と結びついているかを考えるきっかけになると言えよう。

この精神のもと、日本の高齢者の悲嘆と死別に関する私の研究を取



り上げたい。本発表では、少子高齢化社会の現状を見ることが、死を再考する助けになる一方で、死に目を向けることが、高齢化社会を再考する助けになるということ明らかにしたい。その過程で、死の最終的狀態、その不快で避けるべきものとしての特質、そして、それが高齢者のウエルビーイングに与えるネガティブな影響に対する疑問に注目することになるだろう。上記の研究で私が主張したのは、多くの人間にとつて、死は最後の別れではなく、また、ウエルビーイングを脅かしたり、それに悪影響を与えたりするものではないということである。実際のところ、死は、持続する愛の重要性を再発見するきっかけになるかもしれないのである。そして、このように死をとらえることで、老齡期への移行を容易にし、社会を発展させることにもつながるのである。

以上の考察を裏づけるためにも、参加者の皆さんには、夫と死別した二人の高齢の女性のケーススタディを検討していただきたい。どちらの女性も、人生の後半を夫の介護に費やし、夫の死後は一人で生活している。どちらの事例においても、夫の死の記憶が、それぞれの女性の内に、激しい情動的反応を呼び起こし続けている。しかし同時に、どちらの女性も、文化的な意味をもつ儀式の実践を通して、亡き夫との結びつきとコミュニケーション感覚を維持している。

## 背景

これまでの死者および高齢者のケアの研究は、その対象となる人間の成人した子どもに焦点を当ててきた。この事実は、部分的には、親孝行に関する文化的規範と家モデルに基づいた家族間の相続のパターンによっている。しかし、これらを支えてきた価値観と物質的・経済的条件は、二〇世紀半ば以降、急速に変化してきた。

少子高齢化社会により、ケアをするものとしての成人した子どもの数が少なくなり、老老介護が急速に増加したのだ。それゆえ、これからの加齢と死の意味について考えるには、配偶者間の関係をより重要視しなければならないのだ。

私の考えでは、とりわけこれから見る事例においては、儀式の実践により、遺族が死の先にある、主体性を拡張する超越感 (sense of transcendence) を発見することが可能になり、そのおかげで加齢と死と喪失への恐怖が和らいでいる。死を超越する過程のために必要なのは、想像力と可能性、あるいは、反世界を予想することについての感覚の維持である。そして、この想像力を維持する力とは、愛のことなのだ。

以下で私が論じる事例からわかるのは、おそらく死と同様に、愛とは、他者との関わりの中で自己を形づくるものであるということである。それゆえ、文化的・歴史的に位置づけられながらも (culturally and historically situated)、ダイナミックで、年齢を含んだ個人を取り巻く状況に左右されるものなのである。

愛は、それが最愛の人のウェルビーイングへの気遣いを要求する限りにおいて、想像力を要求する。私は、自身の恋人の欲するものを想像し、自分自身がその欲求の対象となれるように努めたり、その欲求の実現をもたらしことができる人間になれるよう努めたりする。人類学者の Lilian Kennedy (2017) は、認知症患者とその介護者についての研究を行い、次のように論じている。

この世界で人間であることに意味を与えるのは、親しい人間が、その人の存在をそれ自体として認識することである。「……」それゆえ、私たちは、ケアの相互関係の中で、家族的生活のあれこれ (the back-and-forth of familial life) を通して形づくられるのである。ケアを施し、それが受容され、認識される(こと)は、私たちは、自身が一個の人間であることを知るのである。

愛する人の死を嘆く人であればよくわかることだが、上で述べられているような相互に反応するための努力あるいは、愛することの責任 (loving responsibility) というのは、愛する人の死によって、必ずしもなくなるわけではない。そうではなく、愛する人の死によって深まり、一方で影の中で輝きながら、その趣きを変えるのである。

Lisa Stevenson (2014) によれば、愛により、「私たちは、想像力に富んだ存在として、自身とお互いをケアすることが可能になる」(Stevenson 2014: 174)。このケアが、存続すること、死者のために生きることの理由になる。私が話した何人かの日本人は、亡くなった配偶者の周忌法要のために、可能な限り長生きしたいと述べた。一方で、イングランドでは、高齢者は、孫の成長を見るために、できる限り長生きしたいと考える傾向にある。しかし、愛は死を恐れない理由でもあるのかもしれない。というのも、それは、天国にいる愛しい人と再会するチャンスだからだ。

ここで、私が、愛と想像力という用語を甚で用いられるようなわけだけの慣用表現としてではなく、分析的な用語として用いているということは明確にしておきたい (Rang 2006 を参照)。日本人の私の調査対象者は、自身の気持ちを表す際に、「愛」という言葉をめつたに使わなかった。そのような言葉は、愛を表すには抽象的すぎるのだ。代わりに、彼らは、死者と一目会いたいとか、話したいという切望を口にし、彼らに安らぎを与える存在感について話した。こうした感覚は儀式に基づいていて、儀式は、日常生活の中に非物質的な存在をかたちづくり、組み込むことを可能にするための、ひとまとまりの象徴的で物質的な<sup>いかり</sup>錨を提供するのだ。私が主張したいのは、この象徴的想像力 (symbolic imagination) という人間に固有の能力、すなわち、事実を超越した物語を創作し、我々にそうであったかもしれないことへの感性をもたらし能力により、ケアの相互関係が死を超えて続いていくことが可能になるということである。ジュデイス・バトラーが言う通り、死が

人間を「取り消しendo」うるものだとすれば、想像力は、人間を「やり直しredo」うるものと言える。

このことは、先祖供養の伝統をもつ文化において顕著である。そのような文化では、人々は、死者の行為者を想像するような、より強い傾向をもつ。例えば、Blinda Straightの観察によれば、ケニアのサンプル族では、生ける者と死者のもつれた行為者性が意味するのは、「死は生の中へと繰り返し突発し、社会的関係を想像し直すことを要求する」ということである(2008)。死にまつわるものと同種の人間と社会的関係の「取り消し」と「やり直し」は、愛にも見られる。愛とは、決して単に一個のものではあることはできない。アーシュラ・K・ルッグウインが述べた通り、人生を通して「それは、パンのように、作られ、絶えず作り直され、新しくされなければならない」のである。

死と愛について考えれば考えるほど、両者がよく似たものであることがわかる。しかし、今日は、エロスとタナトスの抽象の世界に迷いこむのが目的ではない。私は、哲学者でもなければ、詩人でもない。人類学者である。私の考えでは、愛と想像力に関する上記の考え方は、人々の日常的事話に基づいている。そして、これらの実話が、いかにして死と向き合うか、そして、どのように愛するかということについて、高齢化から何を学ぶことができるかについての洞察を与えてくれると私は信じている。

## 事例一：TERADA NORIKO

介護をした家族の死別後の適応についての心理学的研究においては、死別の前に、介護者と被介護者の間に良い関係があるほど、その後の死の受容とウェルビーイングにつながりやすいことがわかっている (Bass and Bowman 1990; Bonanno et al. 2002; Carr et al. 2001)。しかし、たとえば、死の前に良い関係があったとしても、死

の状況次第では、ウェルビーイング感を取り戻すのが困難になるほどの後悔の念や罪悪感が生み出されることもある。儀式は、死者に対して持続的に抱かれる愛と死別の苦痛を統合する有意義な物語 (narrative) を提供してくれる。

これは、私の隣人である寺田さんの話である。初対面のとき、彼女は四か月前に夫を亡くしたばかりであった。彼女とその夫の結婚は完璧なものではなかったが、彼女は、くすくすと照れ笑いをしながら、二人が六〇年前に同じ工場で出会ったときのことを話してくれた。「私たちは恋愛結婚でした」と言つて、その当時はまだ恋愛結婚が珍しかったことを説明してくれた。

寺田さんは夫の死の前の一年間、自宅で彼を介護した。当時、彼女の夫はほとんど寝たきりであった。彼女は慕わしように二人で行った旅行や夫の笑顔を見たときの幸せ、苦しいときにお互いを支えあってきたことなどを回想した。

夫が死ぬ直前の数か月間は介護が最も大変だったのだが、そのころ彼女の夫はよく、朝早くに起きて彼女に手紙を書くようになった。彼女は山積みの手紙を私に見せてくれた。それらはどれも「ありがとう」で始まっている。そのあと、彼は事物の名前や出来事の詳細を思い出せずに、混乱してしまつたようである。文章は次第にまとまりがなくなつていき、そのあと手紙は止まつてしまう。寺田さんがこれらを見つけたとき、彼女はすでに彼が彼女に手紙を書いていることを知っていた。夫婦が、それについて話すことはなかったが、彼女の家のある箱には、完結していない手紙が今も残っているのである。

寺田さんは夫の死後ひどく落ち込み、元々小さな体であつたのに、数週間でさらに七キロも痩せてしまつたそう。しかし、彼女は付け加えた。四十九日法要の日、僧侶が彼女に「あなたが体をこわしてしまつたら、誰が旦那さんの供養をするのですか」と言つたそうである。

亡き夫のケアのために生き続けなければならないという考えが、すべての女性を勇気づけるとは限らない。しかし、寺田さんは、「愛ゆえに」夫と結ばれた人であったので、彼女には僧侶の言葉が強く響いた。

「それが私のやるべきことです。彼女は、隣の部屋のまだ新しい仏壇を見ながらそう言った。「私は彼のケアのためにできるだけのことをします」。

中には、被介護者との関係性について、より踏み込んだ考えを語る介護者もいた。彼らにとっては、介護者も被介護者も同じ「命」であり、「その同じ一つの命の」「より弱い」部分を補助するのは「より強い」部分の義務であるので、介護をしたいという欲求は自然に湧くはずのものである。この考えのもとで、介護者は、一方で愛と介護の実践を通して両者が「同じ命」であることを想像しながらも、他方で同時に共感的想像力の限界と他者性を認識することで、自分たちと被介護者とを区別することができるのである。

他者をケアすることに関する責任感は、以上のような自己と生のとらえ方、すなわち、Marshall Sahlins が言うところの「存在の相互性 *mutuality of being*」(Sahlins 2013) から生じるものである。このことは、生について重要であるのと同じように、死についても重要であった。また、これは、とりわけ被介護者と死別した高齢の介護者にとって重要であった。

私は、寺田さんの小さな家で、仏壇の前に、彼女と座った。三年前に亡くなった彼女の夫の遺影は、まだ仏壇の真ん中にあつた。その上の段には、彼の戒名がつづられた位牌があり、その横には、別の戒名が朱色でつづられていた。そのころはお盆休み明けであつたので、私は仏壇の前で手を合わせなければと思つてた。遺影には、最後に家族で行つた温泉旅行で撮られた写真が用いられていた。寺田さんは、今でも仏壇で夫と顔を合わせるときは、この旅行のことを思い出すそうだ。だが、その元の写真とは異なり、遺影写真では背景が切り取られていた。それにより、寺田さんの夫は、どこかよくわからないところに、いつも通り、しかし、我々

とは別の世界で存在しているように見えた (Izary 2014, S163; Scharfschneider 2003, 204)。「この写真の彼、とても素敵じゃない？」無邪気に私を見上げながら、彼女はそう言った。

「私はまだ彼をお墓に入れたくないのです。私が死んだら、一緒に入ります」。彼女は自らの感傷的で演技じみた仕草に気づいて照れ笑いをした。「私たちの名前も同じです」。彼女は位牌を示しながら言った。「私が死んだら、私の名前も金色になります。彼と同じようにね。そして、私たちはまた一緒になれます」。

それから、寺田さんは私に見せたいものがあると言って動き出した。彼女はゆつくりと腰を曲げ、仏壇の下の小さな戸棚を開けた。そこから取り出されたのは、淡いターコイズブルーの円筒状の陶器であった。彼女がそれを私の前に置き、蓋を開け、中にある夫の骨を見せてくれたとき、まるでクッキー瓶みたいだと私は思った。私はそれらの美しさと繊細さに衝撃を受けた。寺田さんが見せてくれた骨は、貝殻のかけらのように曲がり、損傷していた。しかし、やさしい曲がり方であった。骨にかぶせられた小さな紙をめくると、「これが私の夫です」と彼女は言った。

彼女はその紙を手にとって広げた。そこには、彼女自身が書いた夫の戒名と日付、そして、彼女自身の名前があった。毎年それを書き、骨壺の中に入れ、次のお盆の最終日にそこに書かれたメッセージと彼女の思いが夫に伝わるようにと願いを込めて、庭で燃やすそうだ。紙をいじくりながら、彼女は遺影を見上げた。そして紙を広げて眺めながら言った。「毎年、これを二枚書いて、彼と一緒にここに置きめるのです。そして、お盆になると、その庭で燃やすんです。こうやって彼にメッセージを送っているのです」。

その部屋の反対側には、何もないスペースがあった。ここで彼女は、可動式ベッドに横たわる夫を介護していたのだ。介護者の家では、可動式ベッドが仏壇と同じ部屋に置かれるというのはよくあることだ。多くの場合、仏壇のある部屋が、その家で最も広く、最も行き来しやすい部屋だからだ。寺田さんの場合も同様だった。そして、彼女はインタビュウの最中、夫について話すときは、しばしばまるで彼がまだそこにいるのを想像す



るようにその場所を見渡した。ベッドに座って寺田さんに手紙を書いていた彼は、もはやそこにはいない。今度は、彼女が夫に手紙を書く番である。

## 事例二：YAMADA

私が山田さんに出会ったのは、京都大病院の近くのカフェであった。娘とともに、私のすぐ近くのテーブルについた山田さんは、すかさずたばこに火をつけ、どっしりと腰を下ろした。コーヒーを頼んだ後、山田さんはこちらを向き、私が何をしているのかを尋ねてきた。私は、前日の介護施設訪問に関するフィードバックを書いているのだと説明した。

「歳をとるといふのは本当にいやなものですね!」と、険しい表情を見せながら、彼女は言った。そして、「私はいまさつき健康診断に行ってきたところなのですが、腰をやってしまったんですよ!」と続けた。

少したじろぎながらも、たばこをもみ消した彼女に私は近づいた。自身の体や心について愚痴をこぼすというのは、私が会ってきた日本人高齢者が、会話の第一歩として、自身の経験と私を結びつけようとするときによく用いる手段であった。それは、話の舞台を設定し、自身の加齢を演出する常套手段であったが、彼女の話はそこで終わらなかつた。

「私は八月に富士山に登るために、お医者さんのところに行つたんです。私はダメと言われると聞かない夕チなんです。だから私はあきらめません!」彼女が続けた。

今回で三回目になります。前回は一〇年前、私が七一歳のときでした。その前は七〇歳のときでした」。

どうして今回また行くことにしたと思いますか。元々行こうとはしていたんです。でも、夫が心配だと言うので、行くことができませんでした。ですが、去年の五月に、夫が亡くなりました。そこで今回彼の写真を持って富士登山することに決めたんんです。彼が亡くなったとき、私には生き続ける理由がないと本気で思いました。死んだほうがましだと思っただけです！ 本当に落ち込んでいました。四十九日法要までは、本当に本当につらかった。

しかし、富士登山を思い立ってからは、エネルギーが戻ってくるのを感じたのです。今の私は、このために生きています。彼の写真を持って富士登山することは、私の人生の目標なんです。

とりわけ晩年の介護予防をしようとする高齢者の間では、ハイキングや登山は人気のある趣味である。三浦雄一郎は、日本では、健康面の不調を克服して最高齢でのエベレスト登頂を成功させたことで有名である。しかし、夫とともに富士山頂からの景色をおがむという山田さんの目標は、単なる運動や高齢者としての功績のためのものではなかった。山田さんの目標は、ケアを実行すること、そして、亡き夫へのさらなる愛情に到達する方法としての死の重要性と関わるものでもあったのである。

山田さんの話は、愛がいかにして想像力を要求するかを示している。残されたものにとつて、死とは一回ぎりの出来事ではなく、傷心と回復が一生続く過程なのである。山田さんは、四十九日の後、自身の傷が癒えるのを実感した。しかし、彼女の愛はさらなる要求をした。夫を富士山に連れて行くという計画は次第に具体化していった。ところで、なぜ富士山なのだろうか。

私が、山田さんに尋ねたとき、彼女は微笑みながら教えてくれた。「すべてグランドキャニオンのおかげなんです」。人生を通して働きづめだった山田さん夫婦は、退職後にアメリカで長期休暇を過ごしたそうだ。

グランドキャニオンを見た主人は、どんな心配事も忘れて、その日から生まれ変わって、お互いを守りあおうと言いました。それぐらいグランドキャニオンはすばらしかったんです！ 見上げれば広い空！ 私たちは小さな飛行機に乗って、グランドキャニオンの上空を飛びました。信じられないほど広大だった。だから、全部グランドキャニオンのおかげなんです。

目じりにこみあげる涙とともに、言葉に詰まりながらも、彼女は続けてくれた。

彼は今も私を見守ってくれています！ 何かしなければならぬとき、たとえ雨が降っていても、すぐに晴れる。パパのおかげで！ 彼が私を見守ってくれていることを私は知っています。だから私は富士登山をあきらめません。絶対に！ ただ生きるだけなんてできませんよね？ 目的もなく生きるなんてできません。しかも今の私はひとりです。何か生きる目的が必要なんです。山登りは本当につらいものです。でも、頂上の景色を見れば、それはすばらしいものです。だから私は進み続けるのです。そう、進み続けるのです。

最終的に、山田さんは夫の写真とともに富士登山を成し遂げたが、それは一回目ではかなわなかった。気象条件がわるく、彼女の準備では対応できるものではなかった。できる限りのことはやったが、七合目の山小屋で、下山を余儀なくされた。

麓にたどり着いた山田さんは、当然のようにがっかりしながら、天使の輪のような変わった雲が山の上に広がっていたことに気づいた。これが単なる気象現象の気まぐれ以上の何かであることは、山田さんにはわかつ

ていた。彼女は後日私に手紙で教えてくれた。「下山してから、雲をかぶった富士山を見ることができ、パパが、せっつかく富士山に来たのに、その富士山を見ることがなく下山するのは可哀想」と、見せてくださったと感謝しました」。

次の夏、山田さんは八三歳にして夫の写真との登頂を成し遂げた。登頂後、彼女は自身と娘、そして亡き夫の遺影との新しい写真を撮った。

ここで、ケアと追悼、そして死後の生活の関係をどのように理解すればよいだろうか。愛と想像力がなければ、夫を富士山頂へ連れて行き、壮大な景色を見せるというミッションが山田さんにとって意味をなさないことは、明らかであるように見える。彼女の登山は、死を超越する方法だったのである。すでに亡くなっていたとはいえ、彼女の夫は、彼女と同じように、まさに生きており、ケアを受容することができたのである。

山田さんは物理的に夫を山に連れて行くことができた。そして想像力を通して、以前グラウンドキャニオンの広大な空を仰ぎながら二人で交わした約束を彼女が覚えていることを示すことができたのだろう。寺田さんの事例と同じように、想像と追悼の儀式が重要であった。文化的象徴と物語 (narrative) が、彼女の気持ちを実践に移したのである。

さらに彼女とその娘は、新しい三人のイメージを——物好きな人類学者にさえ分け合い、見せてあげられるような、記念品の新しい記憶を——作り出した。

よく見ると、その写真の中にはさらに写真がうつつている。山田さんの夫はそこにはいないが、彼の写真はそこに何の苦勞もなく存在している。彼の顔は、どことなく傷つきやすさ (vulnerability) と義務感 (obligation) を感じさせる。不自然さも疎外感もない、むしろ命を吹き込まれたような、生きて山田さんと登山を成し遂げたかのような写真だ。まさにこの表情が、山田さんに行動させ、医者や娘たちとたたかい、山で命の危険とた

たかうよう奮い立たせたのである。

娘にとつてはひと安心と叫ぶところだろうが、山田さんには、もう一度富士山に登る力はない。代わりに、元気を保つために彼女はカラオケに行き始めた。「テレビで彼と行った国を見たり、カラオケで彼と歌った曲などを歌うと、今でも泣いてしまいます」と彼女はつぶつた。

主人は昔からお前は自分より先に死んだらあかんよとよく言っていましたので、私は主人の分まで生きなければと老体に鞭打つて頑張っています。私も八三歳。あと何年生きられるかわかりませんが、生あるうちは明るく楽しく生き抜くことを決意しました。

夫に対する彼女の愛は、老いてなお最高の人生を歩めるよう、彼女を動かし続けているのである。

### 結論…高齢化社会における愛と想像力

かつてジョン・レノンが言ったように、「必要なものはただ愛だけなのだ (All you need is Love)」ということを私が言っているように見えるかもしれない。つまり、日本のような高齢化社会における生と死に関する諸課題は、私たちがもつとお互いを愛し合うことで適切に対応できるのだ、と。残念ながら、事態はそれほど単純ではないだろう。今日私が言及した事例では、死を超越する愛は何十年もかけて醸成されたのであり、このためにはまず、何年間も病と介護の時期を耐え忍ばなければならなかった。このような愛は、尊敬に値するものである。

このような事例について議論することは、若い人々や中高年の人々が、彼ら自身の長期的な関係性についてよく考え、歳を重ねるにつれて自分の両親や祖父母を支えていくことの助けになるであろう。これらの事例は、高齢者による悲嘆とのたたかいのロールモデルになりうるものである。また、臨床医や宗教団体にとつては、配偶者の死によつて孤独を感じている高齢者のグリーフ・カウンセリングや精神的ケアの提供に役立つものも考えられる。そして、高齢者は老いと死別による苦しみをより深い愛情を再発見するチャンスととらえ直すことができる。

超高齢社会の時代にあつては、老齡期と死についての語り (narratives) を多様化しなければならない。老齡期と死についての語りを〈良い加齢 (successful aging) vs. 衰退 (decline)〉とか〈レジリエンス vs. 病的な悲嘆〉といった仕方で二分することでは、人間の生の複雑さを把握することはできない。それどころか、むしろ有害かもしれない。そうではなく、我々人間に固有の能力としての愛と想像力に着目することで、個人の人生という長旅を支え、社会を進展させることができるのである。

#### ■付記

本発表におけるケーススタディは、Companion to the Anthropology of Death (Wiley-Blackwell, 2018) の “Mourning and Mutuality” という章のものを元にしてゐる。

#### ■参考文献

Bass, David M. and Karen Bowman. 1990. “The transition from caregiving to bereavement: The relationship between care-related strain

- and adjustment to death." *The Gerontologist* 30(1): 35-42.
- Bonanno, George A., Camille B. Wortman, Darrin R. Lehman, Roger G. Tweed, Michelle Haring, John Sonnega, Deborah Carr, and Randolph M. Nesse. 2002. "Resilience to Loss and Chronic Grief: A Prospective Study from Prolonged to 18-Months Postloss." *Journal of Personality and Social Psychology* 83 (5): 1150-64. <https://doi.org/10.1037//0022-3514.83.5.1150>.
- Carr, Deborah, James S. House, Camille Wortman, Randolph Nesse, and Ronald C. Kessler. 2001. "Psychological Adjustment to Sudden and Anticipated Spousal Loss Among Older Widowed Persons." *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences* 56 (4): S237-48. <https://doi.org/10.1093/geronb/56.4.S237>.
- Erizary, Joshua A. 2014. "Signs of Life: Grounding the Transcendent in Japanese Memorial Objects." *Signs and Society* 2 (S1): S160-87. <https://doi.org/10.1086/674538>.
- Kennedy, Lillian. 2017. "Who Is the 'Who' in Dementia Carework? Somatosphere." *Somatosphere (blog)*. January 10, 2017. <http://somatosphere.net/forumpost/who-is-the-who-in-dementia-carework>.
- Ryang, Sonia. 2006. *Love in Modern Japan: Its Estrangement from Self, Sex and Society*. Routledge.
- Sahlins, Marshall. 2013. *What Kinship Is-And Is Not*. University of Chicago Press.
- Schattschneider, Ellen. 2004. "Family Resemblances: Memorial Images and the Face of Kinship." *Japanese Journal of Religious Studies*, 141-162.
- Stevenson, Lisa. 2014. *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic*. Berkeley: University of California Press.
- Straight, Bilinda S. 2006. "Becoming Dead: The Entangled Agencies of the Dearly Departed." *Anthropology and Humanism* 31 (2): 101-110.

(Jason Dineley オックスフォード・ブルックス大学人類学部准教授 [jdineley@brookes.ac.uk](mailto:jdineley@brookes.ac.uk))  
(翻訳: 佐竹佑介 翻訳協力: 林悠子、バク・ユンジョン、丸山文隆)